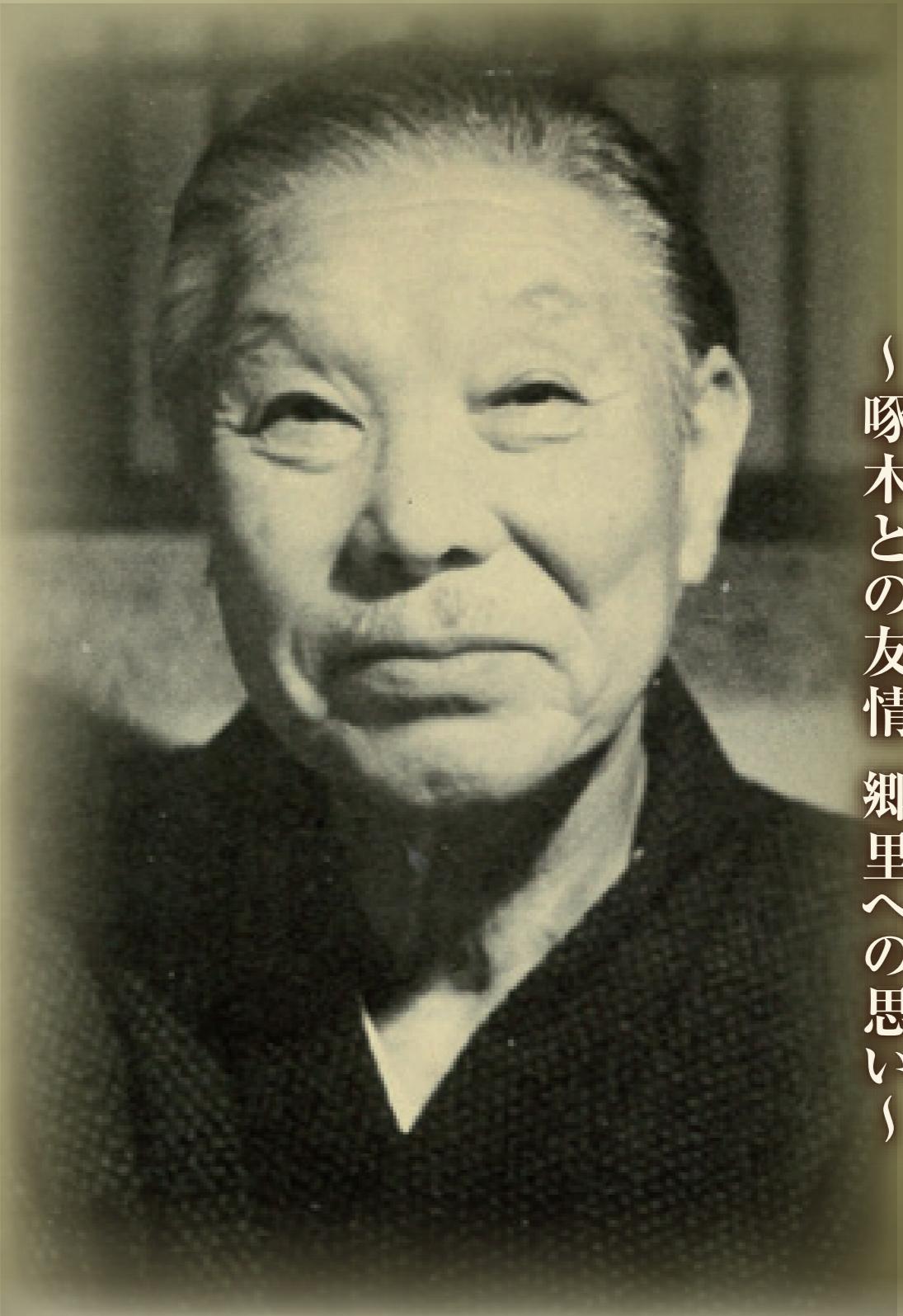


# 宮崎郁雨

（啄木との友情 郷里への思い）



令和4年6月、荒川集落の松浦保育園敷地内に一対の歌碑が建てられました。そこに刻まれた歌人の名は「啄木」と「郁雨」。啄木は、歌集「握の砂」で有名な石川啄木。郁雨とは、宮崎郁雨（本名：宮崎大四郎）。明治18（1885）年、北蒲原郡荒川村（現新発田市）に生まれた郁雨は、4歳（数え年で5歳）の時に、家の没落により函館に移り住みます。その函館の地で、22歳の時に出会って以降親友となった啄木と、その家族の物心両面の支援を惜しまなかつたため、のちに「啄木を世に出した人」と言われました。

今月は、宮崎郁雨と石川啄木のあつい友情、そして、郁雨が抱いていた郷里への思いを果たすため、歌碑の建立に携わった方々について特集します。

## 宮崎郁雨 その人となり

東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹とたはむる しらすな

啄木

右の巻頭歌で有名な「握の砂」の冒頭に「函館なる郁雨宮崎大四郎君 同國の友文学士花名金田」京介君 この集を両君に捧ぐ。（後略）」という一文があります。金田一京介は盛岡尋常中学校での啄木の先輩で、言語学者でありアイヌ語研究の創始者。また、郁雨について、啄木は「宮崎君あり、これが眞の男なり。この友とは七月に至りて格別の親愛を得たからも二人のあつい友情がうかがえます。

自らも短歌を詠み「恋に恋する」ような文学青年であった郁雨。「郁雨」は雅号であり、當時思いを寄せていた女性「幾子」から取ったそうです。

啄木の優れた天分と深い文学上の造詣、自らとは対照的な人柄などへの憧れ、そして、幼い頃に故郷を離れ、貧しい生活をした経験から啄木一家の困境に深く同情したことが、その後の郁雨の献身的な支援につながります。啄木が創作活動に集中するため単身上京する際にも、郁雨はその費用に加え

て、函館に残された家族の生活の面倒も引き受けます。啄木の死後は函館の立待岬に啄木一族の墓を建てるなど、生涯を通じてその顕彰に努めました。

孫の宮崎雅史さんは、令和4年6月に行われた歌碑完成式典の中で、6歳から13歳の頃までいつしょに過ごした晩年の郁雨との思い出を「物静かで、きちんと着物を着て正座している。非常に優しい人でした」と語っています。

○印：宮崎郁雨 ◆印：石川啄木 ☆：双方



▲新婚時代の明治43年ごろ。郁雨と妻のふき、長女の孝  
出典：宮崎郁雨著「函館の砂 一啄木の歌と私と」（1960年、東峰書院）



▲明治37年。婚約時代の啄木と妻の節子（ふきの姉）  
出典：吉田孤羊著「啄木写真帖」（1952年、乾元社）の95ページ

啄木の生涯、そして死後も友情を持ち続けた郁雨は、一つ違いの義兄の気持ちを忖度して行動し、多額の資金を支援しました。その背景には、事業で成功した父 宮崎竹四郎の協力もありました。



新発田郷土研究会 理事  
鈴木秋彦さん

## 宮崎郁雨・石川啄木 略年譜

◆	○	◆	○	☆
明治18年	4月5日、北蒲原郡荒川村字荒川 宮崎竹四郎の長男として生まれる	明治19年	2月20日、岩手県南若手郡日戸村曹洞宗常光寺に、父一楨の長男として生まれる	
明治20年頃	祖父の浪費により宮崎家が潰れ、父は単身函館へ。自身は母の実家に預けられる	明治22年春	父の迎えで一家函館に移る。父、麴製造を始めたが失敗	
明治27年	父、独立して味噌屋を始める	明治37年	堀合節子と婚約。翌年結婚	
明治39年	文芸結社「首筋社」に加盟する	明治40年	文芸誌「紅首筋」創刊。5月、首筋社に啄木を迎える。7月、啄木の妻子来函。8月の函館大火により、9月、啄木が函館を去る	
明治41年	4月、来函。家族を郁雨に託して上京。金田一京介と同宿する	明治42年	郁雨、啄木夫人の妹、堀合ふきと結婚	
明治43年	4月13日、啄木、没。享年27。4月20日、歌集「悲しき玩具」刊行	明治44年	郁雨が節子に出した手紙が誤解を生み、啄木は親友で義弟の郁雨と親族の縁を切る	
明治45年	5月5日、啄木の妻節子、没。享年28	大正2年	2月7日、郁雨の妻ふき、没。享年68	
昭和30年	3月29日、郁雨、没。享年78	昭和37年		

# 望郷の念を歌碑に込めて 郁雨生誕の地に建立



荒川集落  
大沼長榮さん

新発田につづく野の道も  
山も霞めり わが夢の中

「古里や

かす  
山も霞めり わが夢の中

郁雨

啄木没後110年・郁雨没後60年となつた2022年。新発田城南ロータリークラブが主体となり、郁雨の生家があつた松浦保育園敷地内に、一对の歌碑が建立されました。建立に携わった方々の、そこ

に至るまでの思いを紹介していきます。

「大川の水の面を  
見るごとに 郁雨よ君の  
なやみを思ふ」  
おもて  
啄木



令和4年6月12日  
除幕式

歌碑の建立を記念した除幕式では、建立に携わった関係者をはじめ地元荒川集落の方々のほかに、郁雨の孫の宮崎雅史さん、作家の山下多恵子さんらが参列しました。



新発田城南  
ロータリークラブ OB  
時田誠士さん

## 郁雨の献身と二人の友情。広く学びに生かして

令和4年は、函館亀田ロータリークラブと友好クラブとなってから25周年、当クラブも創立55周年を迎える年でした。その節目に、荒川集落の方の賛同と両クラブの協力により歌碑を建立できたことは、大変感慨深いものがあります。

両クラブの交流は、当市出身の郁雨が函館の地で啄木と出会ったことに起因します。啄木の歌集「一握の砂」は、その出会いと郁雨の献身的な友情、そして父 竹四郎による郁雨への陰ながらの支援と思いやりがなければ、世に出ることはなかったと思います。郁雨の人柄と生き方、啄木との友情が広く知られ、新発田が誇る人物の一人として、さまざまな学びに生かしていただけたらうれしいです。



新発田城南  
ロータリークラブ 担当  
尾田一雄さん

あなたも二人の友情に触れてみませんか

### 歌碑の場所



### 歴史図書館



郁雨と啄木の書籍をまとめて紹介しています！

日本海側に啄木の歌碑が建つのは大変珍しく、その一つがこの荒川集落にあるということを誇らしく感じています。今後、より多くの方が訪れて、二人の歌に思いをはせていただきたいです。

石川啄木には宮崎郁雨という親友かつ義理の弟がいて、さらにその人物が荒川出身だということを、作家の山下多恵子さんが出された書籍で知ったときは、大変驚いたことを覚えています。3年前に、新発田城南ロータリークラブの方から郁雨の生家があつた地に一人の歌碑を建てたいとお話しがあり、そのご提案には地域の皆も喜びました。

啄木と郁雨の仲睦まじい友情、切っても切れないご縁に思いをめぐらし、歌碑建立の除幕式では非常に感動しました。

ご縁が結ぶ  
多くの方に訪れてほしい